

のが、各々の下宿先を会場として、これも時の経つのを忘れて納得の行くところまで続けられた。友人の伝で、中国古典の「四書五経」を読む会に参加するようになり、しだいに足繁く会に顔を出すようになった。中国古典の思想そのものより、その中国古典を後代の学者たちがどう読み解いていったのかという訓詁学に興味が強まっていた。漢文の訓読という手法でその一文一文を読み解く行為にのめりこんでいった。そういう状況の中で手にしたのが、岩波古典文学大系の一冊として刊行された川口久雄校注『菅家文章・菅家後集』だった。福岡出身の我が身にとって太宰府天満宮の祭神となつている菅原道真公の漢詩文集であるというだけで興味を引くに十分だった。漢詩文というものが、どのようなものであるかを習得した上でのことではなく、ただ興味の赴くままの契機であつただけに、それが、それほど無謀な、又余りに稚拙な研究対象への動機であつたかを当時の私は、思い至らなかつた。川口久雄氏が校注を施された成果の裏には、どれほどの時間が費やされ又、未知の世界を果敢に開拓されたその窺いしる術もない労力と情熱があつたことを何一つ汲むこともなく、道真の漢詩文を丁寧な校注を頼りに、あたかも自分の力で読み解けているような気持ちになつて、自分の研究対象を「菅原道真」と決めてしまつた。

都留文科大学でこの研究を深めるには自ずと限界があり、更にこの探究心を満たすべく、菅原道真の漢詩文の研究をされている大学等の研究機関を探索した。幸いに熊本大学の金原理先生が、菅原道真関連の漢詩文の優れた研究論文を公にされていることを知り、今思えば、厚顔無恥なことであつたが、直接、都留文科大学在学中に金原先生の研究室にお伺いし自分自身の菅原道真の漢詩文についての研究全般についてお尋ねするという大胆な行動を起こしてしまつた。

こうした非常識とも言える私の言動に対して、親身にそして真摯に助言、ご支援いただいたのも金原理先生で